工部大学校書房の研究(1)

滝沢正順

Library of Kobu-Dai-Gakko (Imperial College of Engineering, Tokei)(1), by Masanori Takizawa.

目次

1. はじめに
2. 工部大学校の資料
3. 工部大学校について
4. 書房について
(以下　次々号)
5. 書房の規則
6. 書房の職員
7. 蔵書と書籍目録
8. 帝国大学工科大学の書房
9. 書房掛廃止以後の工科大学
10. その後の工部大学校校舎

1. はじめに

明治19年3月1日に公布された帝国大学令によって，法・医・工・文・理の5つの分科大学から成る帝国大学が発足する。明治23年には新しく農科大学も設置され，分科大学は6つになる。明治前期には文部省以外の省などによって設置された官立の専門学校が，それぞれの分野での高等教育機関として重要な存在だったが，それらの官立専門学校のうちには，東京大学・帝国大学のなかに併合されていったものがある。現在とのつながりだけでいえば，それらは単に1大学（今の東京大学）の学部の源流の一部であるというにすぎないが，明治前期の教育史の上ではそれぞれが大きな位置を占める別々の教育機関だった。併合された学校名を，明治16年の時点で所属する省とともにあげると，司法省法学校，工部省の工部大学校，農商務省の駒場農学校と東京山林学校である。

明治前期の高等教育機関の図書館については，現在まだかならずしも十分には明らかにされていないと思われるが，高等教育機関の範囲を限定してみると，たとえば明治12年に学位制度ができたとき卒業生が学士の称号を受けられた学校としては，東京大学と上に校名を記した各省の学校（東京山林学校はまだ開校していないが），それに北海道開拓使の札幌農学校があった。[1] これらは学位の点で，今日の大学・大学院に相当するわけであるが，それらの官立学校の図書館[2]のうち，東京大学と札幌農学校の図書館については，その内容はすでにある程度知ることができる。[3] しかしこの2校以外は図書館の内容を詳しく取り扱ったものが特にみられないようである。本稿では工部大学校について，その図書館(「書房」といっていた）の全体像をまとめてみてみたいと思う。[4]

ところで，『帝国大学一覧』は「明治20/21年」[5]から「明治24/25年」まで「第2章・沿革及組織」の冒頭がつねに，「帝国大学ハ東京大学及工部大学校ヲ合併シテ成ル」[6]と記されているが，工部大学校は，明治19年の帝国大学設置当初についていえば，帝国大学の直接の母体となった2つの大学の1つであり，現在一般的に使われている大学図書館という語の，大学という名称の点で，工部大学校は明治以降の早い例の一つである。そして，工部大学校の書房は日本で最初の工学専門の大学図書館であるということになる。

これまで工部大学校の書房についてふれたものとしては，筆者の知る範囲では，藤田豊氏の書かれたもの[7]と，図書館史の年表のいくつかがその設立を記している[8]のが，見出しやすいもののようである。ふれられることの比較的少ない理由には，資料的な制約から詳細が明らかにしにくいことがあるようである。しかし明治前期の重要な高等教育機関の図書館のひとつとして，取り上げる意味は決して小さくないと思われる。

なお，工部大学校の書房は，同校が「工部大学校」といっていたときだけに存在したわけではない。書房の系統は，あとで記すように，明治6年に創立したとされ，

1988年3月12日受理
たきざわ　まさのり　東京大学工学部機械系三学科図書室

工学寮・工部大学校・帝国大学工科大学と存続して，明治26年に廃止された。本稿ではこの流れと，廃止後のことについても少しふれてみたいと思う。

2．工部大学校の資料

はじめに工部大学校（工学寮）全般に関するおもな資料名をあげておくことにする。

（1）『工部省沿革報告』大蔵省編・発行　明治22年
（2）『旧工部大学校史料』『旧工部大学校史料附録』同史料編纂会編　虎之門会　昭和6年
（3）『工部大学校昔噺』(丁友会パンフレット1号）後藤単伝編　昭和2年
（4）『工部省年報』
（5）「工部大学校年報」
（6）『工学寮学課並諸規則』『工部大学校学課並諸規則』
（7）"The Calendar of the Imperial College of Engineering, Tokei (Tokio)"

（1）は，明治18年に廃止された工部省について，大蔵省が編纂したもの。[9]

（2）は，旧工部大学校出身者によって組織されていた虎の門会が出版したもの。[10]『附録』の方は回想が集められている。

（3）は，東京帝国大学・東京大学の工学部の学友会である，丁友会が発行したもの。工部大学校のことや自分たちの先輩であるその卒業生の話を単行冊子として発行したもの。

以上の3種は工部省や工部大学校がなくなってから編纂されたものである。それに対し次の4種は工部省や工部大学校（工学寮）が存在していたときのものである。

（4）は『第1回年報』(自明治8年7月至同9年6月）から『第6回報告』(自明治13年7月至同14年6月）までを参照。第7回以降は不詳。名称は第1～5回は年報だが，第6回は報告。第2回は報告・報告書，第5回は年報書となっている部分もある。

（5）について参照できたのは，『工部大学校第2年報』（自明治16年4月至17年3月)[11]と，『文部省第13年報附録』(明治18年）に収録されている「工部大学校年報」(明治18年）のみである。

（6）は，学課と諸規則を日本文で書いたもの。[12]

（7）は，学課と諸規則，それに各種の試験問題と学生の成績などが英文で書かれている。[13]「東京」のアルファベット表示は，"Calendar"の表紙・標題紙では1883年度まではすべて'Tokei'，1884・1885年度が'Tokio'になっている。

（6）と（7）は，学課と諸規則については，英文と日本文の違いがあるだけで，一対であるような印象を受ける。工部大学校第1回卒業生によって明治12年11月に創立された，日本最初の工学の学会である工学会は，機関誌として『工学叢誌』『工学会誌』を発行していた[14]が，『工学会誌』第36巻（明治17年12月）の「本会記事」のなかにある「会長報告」に，「工部大学校ヨリ同校規則書和洋文ノモノ各一部ヲ本会へ寄附セラレタリ」[15]とあるのは，おそらく『学課並諸規則』と"Calendar"のことではないかと思われる。

3．工部大学校について

さて工部大学校についてあとで必要になる範囲で簡単に述べておこう。[16]工部大学校のことを考える場合，工部大学校だけでなくその前の工学寮も一緒に考える必要がある。書房との関連からは期間的に次の3つに分けるのが適当と思われる。

第1期　工学寮時代
　　明治4－10年
第2期　工部大学校（工作局所属）時代
　　明治10－15年
第3期　工部大学校（工部省直轄）時代
　　明治15－18(19)年

工学寮は明治4年8月工部省の一等寮として設置された（8年11月二等寮に改められる)。工部省は明治3年に，日本に西洋式の工業を確立するため，山尾庸三の建白によって設置されたもので，工学寮はそれに必要な人材を育成するために設けられた。明治7～15年の『学課並諸規則』では，工学寮・工部大学校は「工部ニ奉職スル工業士官ヲ教育スル学校」[17]であるといっている。もっとも16～18年のでは「工部省ニ属シ工学士ヲ教育スル学校」[18]と変化している。

工学寮の最初の工学頭は工部大丞の山尾庸三で，庁舎は虎の門の旧延岡藩邸に設けられた。明治6年の6月に都検（のちに教頭と改称）ヘンリー・ダイヤーをはじめとする9名の外国人教師が到着し，8月には第1回の学生が入学して，実際の教育が始まる。外国人教師はスコットランドに関係をもつイギリス人たちであった。

工学寮・工部大学校の課程は6年で，予科・専門科・実地科がそれぞれ2年ずつになっていた。専門科は，土木・機械・造家・電信・化学・冶金・鉱山の7科あったが，明治15年に造船科が加わって8科になった。[19]専門科では，1年のうち6ヵ月は工学寮・工部大学校で勉強し，あとの6ヵ月は東京や地方の工場・工事現場等で実習を

おこなった。実地科になると2年間とも現場での実習が中心となる。年度は，4月から翌年3月までで，4月から6月までが夏期，10月から3月までが冬期になっていた。

学校の場所は東京・虎の門にあったが，最初は建物の準備が間に合わず，授業のために大和屋敷（もと松平大和守の上屋敷）の御殿の畳をとりはらって教場にしていた。しかし明治6年12月にイギリス人アンダーソン設計の，濠に面した「ゴシック式煉瓦造弐階建」[20]の建物が竣工してこれが教場として使われた。この建物は大きさとしては「格別大ではなかった」[21]というが，濠の向いの道路から建物の背面が一般の人によく見え，当時の虎の門を描いた小林清親の「ためいけ」「虎の門夕景」，井上安治「虎の門工部大学校」にはこの建物が描かれている。[22]明治10年になるとフランス人ボワンヴィル設計の本館が竣工して教場となり，濠に面した建物は博物場[23]となった。本館の建物は明治初期には本格的な西洋建築として有名であり，「其の一階は則ち真の広堂にて主として学校の儀礼用に供せられた」[24]が，この「広堂」[25]は学校外の式典等の会場にも使われた。明治12年に来日して国賓として待遇された前アメリカ大統領グラント将軍の歓迎会の式場にも使われ，明治19年7月の帝国大学第1回卒業証書授与式の会場にもなった。明治23年開催の第1回帝国議会の議場として考えられたこともあったようである。[26]教場としては本館だけでなく，本館を中心にしてその左右両翼にも校舎を増築して，「コ」の字形の配置にする予定だったが，実際には左翼の校舎しか増築されなかったのでカギ型の配置で終った。人力車で虎の門を通ったあるイギリス人は「木造家屋とは一変した対照をみせる，立派な工部大学校」[27]と書き残している。

さて，明治10年1月11日，官制の改革で寮が廃止になり，工学寮は工部大学校と改称されて，工作局に所属することになる。ここからを第2期ということにする。

明治11年7月15日には，明治天皇が来席して，工部大学校開校式がおこなわれ，12年11月8日には，第1回の卒業式があり，23名が卒業した。これ以後，明治18年4月30日卒業の第7回までの卒業があった。

工部大学校の卒業生には1等と2等があり，1等卒業は工学士だったが，2等は単なる卒業生。また3等として修業があり，修業後1年間在校して卒業試験に及第すれば2等卒業と同じになった。この当時，工部大学校以外の工学の高等教育機関としては，東京大学の理学部に工学科ほかの工学系の学科があったが，東京大学では卒業生は全員が学士だったため，工部大学校の学生・卒業生には不満があったようである。しかし明治20年になって法令が改められ，工部大学校卒業生は全員が工学士になった。

明治15年6月には工学寮・工部大学校の運営に尽力してきた教頭ヘンリー・ダイヤーは任期が終わり，帰国する。後任の教頭には化学教師のE・ダイバースが就任する。

明治15年8月19日，工部大学校は工作局から離れ，工部省直轄となる。これからを第3期ということにする。

工学寮・工部大学校の教師は，はじめは外国人教師だけだったが，第3期になると日本人教師（ほとんど卒業生）の方が多くなっている。

明治18年12月22日，工部省が廃止になり，工部大学校は，文部省に移管される。一方，東京大学では，それまで理学部にあった工学系の学科を理学部から分離して，明治18年12月25日に工芸学部を新設した。そして明治19年3月1日，帝国大学令が公布され，工部大学校と東京大学工芸学部が合併して，帝国大学の工科大学となった。

なお，工科大学の予科は明治19年4月1日に東京大学予備門に併合される。[28]東京大学予備門は同月9日公布の中学校令によって第一高等中学校になり，さらに，明治27年6月23日公布の高等学校令によって第一高等学校になる。

工部大学校の卒業生からは明治・大正の工学・工業界の重要な人材が多く輩出していて，明治文化史上の偉蹟[29]という人もいる。人数的には帝国大学以前の工部大学校の卒業生は二百人を越えている。これに対し，東京大学の方は理学士全部でも百人に達しない。[30]

4．書房について

『教育新誌』は明治11年5～9月に「日本書籍館」の連載をしている（掲載号は23，25，27，29～31号）。この連載には16の図書館が紹介されているが，その第27号には工部大学校の書房のことが記されている。全文を引用しておこう。

工部大学校ノ書房ハ明治六年十月中設ケタル者ニシテ東京三年町一番地同校博物場ノ一区内ニアリ其ノ書籍惣計一万二千四百九十一冊アリテ和漢書籍ヲ四千四十六冊トシ外国書籍ヲ八千四百四十五冊トス

また『教育雑誌』第68号（明治11年6月3日発行）の巻尾には明治10年調査の「書籍館一覧表」[31]があるが，この表に出ている書籍館は『教育新誌』連載のものと同一である。両者は館の名称ほか一部違いがあるが，内容（所在地・設立年・書籍数）はだいたい同じである。『文部省

年報』の書籍館一覧表には，管轄を異にするためか工学寮・工部大学校の書房はもちろん載っていない。[32]

『教育新誌』第27号と『教育雑誌』第68号の記載によれば，工学寮時代の明治6年に書房が設けられたわけである。先に濠に面した建物の竣工を明治6年12月と述べたが，これは「工部大学校年報」(明治18年）の沿革概要によっている。[33]この竣工年月と上の引用文中の書房設置年月とを信じるなら，書房の設置は濠に面した建物の竣工よりすこし前であるということになる。すると，はじめは旧延岡藩邸か大和屋敷に仮に書房があったか，あるいは濠に面した建物が完全に完成する前から書房（や他の施設の一部）がすでに置かれていたか，どちらかなのであろう。いずれにしろ書房の設置は，外国人教師たちの到着と第1回の学生の入学のあとであるということになる。そして濠に面した建物が，明治10年になって教場でなく博物場になったときにも，まだ書房はこの建物の中にあったことになる。造家科を明治12年11月に卒業した工部大学校第1回卒業生で工部大学校の助教授であった，曽禰達蔵の回想によれば，内部の様子は次のようである。

> 此の建物の特徴は中央の広堂で中に二列数本の長き木造簇柱の立てると二階の床に当る所は三方廻り廊下にて中部は高き一階となり，上は実に手の込入った見事なる木造の穹窿天井となって居た等である。其の廻廊床は壁に接して一列に書棚が設けられ，其の反対の欄干に接しては閲覧用の卓子が造り付けられてあった。即ち此の廻廊は書房と称へられて図書室兼閲覧室である[34]

工学寮時代の書房の担当は図書科もしくは図書課であった。先の引用文中の書房設置年月より前の，明治5年6月27日に定められた「工学寮職制並事務章程」では「工学寮ハ工業ノ学ニ関スル一切ノ事務ヲ掌管ス」(事務章程）として，主記課・主計課・文学課・選輯課・図書課の5課が設けられている。そして図書課は「図画書冊器械収蔵出納等ノ事ヲ管ス」と規定されている。[35]また「工学寮及測量司分課處務規定」の図書課には次のようにある。[36]

> 本寮所蔵ノ図書器械ヲ掌ル。
>
> 書籍画図器械ハ悉ク号数ヲ詳記シ損壊ナカラシム寮中職員及学生ノ借覧ヲ請フ時ハ證札ヲ取テ之ニ付ス若シ紛失ノモノアレハ之ヲ贖ハシム。

書房の場所は，その後明治10年のうちか11年の半ば頃くらいまでに博物場から本館へと移される。明治10年なら，『教育新誌』第27号と『教育雑誌』第68号に載っている書房の調査のあとということになる。本館の竣工は明治10年であるが，その具体的な月日の記載は，3月，[37]6月20日，[38]10月20日[39]と，文献によって必ずしも一致していない。しかしいずれにしろ，書房が本館へ移されたのは，本館が完成してからあまり時間がたたない間と考えてよいように思われる。「工部大学校年報」(明治18年）の沿革概要の部分には，明治10年3月本館が竣工したと記したあとに続けて「乃中堂広間ノ二階ニ書房ヲ置キ左右翼ノ各室ヲ各科ノ教場ト為ス」[40]と記している。『工部省沿革報告』の工部大学校の沿革も字句は異なるが同じ書き方をしている。[41]かりに移転がすこし遅かったとしても，明治11年7月15日までには本館に書房が移され，その体裁は整っていたと思われる。この日はすでに記したように，明治天皇の来席した工部大学校開校式の日で，式の際に，天皇は工作局長大鳥圭介に先導されて校内を案内されたが，案内されたなかに書房も入っており，[42]案内の順序からいって本館に書房があると思われるからである。

さて曽禰達蔵の回想を再び引用しよう。

> （本館の）建物の中央は前部に於てこそ三階建なるが其の主体なる後部は広堂にて之を中房と称した。長さ約百尺，幅約五十五尺あり……。二階床と同水平に三方廻廊を廻らし，図書室兼閲覧室となせるは濠上の建物の中堂と同上であった。[43]

濠に面した建物のときにも，本館のときにも，書房は建物中央の二階にあったわけである。書房が教室間の中央的な位置にあるという配置は，ことによると都検ヘンリー・ダイヤーの意図によるものであるかもしれない。それは，ダイヤーが校舎の構造や教室の位置を考えたという記述がいくつかあるからである。[44]たとえば，明治35年にダイヤーに対し，東京帝国大学名誉教師の称号を授与するときの称号附与申請書のなかには，ダイヤーの功績として，工学寮・工部大学校で「同校創業ニ際シ学科課程ハ勿論，其他諸規則ノ撰定又ハ校舎ノ構造教場ノ配置等ヲ計画シ」[45]とある。

本館の書房の様子については，“Calendar”(1883年度と1884年度）の‘General Regulations’のなかの‘Library’の部分に次の文章がある。[46]これは工学寮・工部大学校を3つの時期に分けたうちの第3期のわけであるが，同じ年度の『学課並諸規則』の書房の部分より詳細である。

> The Library is contained in the spacious side galleries of the Examination Hall. The books are in wall-cases, and are about twenty thousand in number. The floor of the galleries is provided

with reading tables, and besides this accommodation there are two Reading-Rooms furnished with current periodicals, one set apart for the use of proffesors and instructors, the other for students.

また

The Library is divided into the General Library and the Class Library, and is open during all College hours, for the consultation or borrowing of books.

第3期の『学課並諸規則』では，General Libraryは参考用図書，Class Libraryは教科用図書か科業用図書といわれている。Class Libraryの方は授業のテキストが中心で，General Libraryとは利用のしかたが異なるので，図書の種類としてだけでなく，置き場所も区別されたのだろう。

表1　書房関係名称の和英対照

	第1期	第2期	第3期
Library	書房		
Librarian	図書科	書房掛り	書房掛
General Library		調査用図書	参考用図書
Class Library		教授用図書	教科用図書 科業用図書
Reading Room	読書室		

書房関係の名称の英語と日本語を，“Calendar”と『学課並諸規則』について対照させてみると，表1のようになる。(日本語の方の変化する年は後述する)。libraryにたいして書房の訳語をあてることは，明治時代の英漢・英和の辞書に例がいくつもあって，工学寮書房のできる以前の辞書のなかにも数例が見出だせるという。[47] General LibraryとClass Libraryの区分は，第1期の『学課並諸規則』と“Calendar”ではみられない。また，Class Libraryは複数形のときもある。『学課並諸規則』以外では，第3期のGeneral Libraryに参考部，第2期のClass Libraryに課（科）業用図書，第3期のClass Libraryに教科部・日科部・日科本という語も見られる。しかし『学課並諸規則』のなかのものもふくめて，これらの日本語が，工部大学校での公式の名称としてでなく，一般的な用語として使われている場合もおそらくあるのだろう。本稿で使う用語は，引用以外については，一応，『学課並諸規則』で使われている語句（表1の枠内にあるもの）で統一することにする。読書室については“Calendar”では，第1・2期の明治6～14年度は‘a Reading Room’だが，第3期の明治16・17年度は上に引用したなかにあるように‘two Reading-Rooms’で，教員用と学生用に分けられている。また，表1のLibrarianの日本語は，図書館員についての一般的な用語でなく，担当する係の名称である。

Class LibraryとGeneral Libraryに関していうと，あとに述べる書籍目録ではClass Libraryには多くの複本がみられる。このように授業のテキストを学校で用意することは，当時としては決して例外的なことではない。他の学校の場合をすこし詳しくみてみよう。たとえば，（東京）開成学校・東京大学では教科書を購入できない学生に貸すための多くの複本が蔵書目録に見られるという[48]し，司法省法学校では，明治14年改正の「法学寄宿生徒規則」第1節総則第9条は「学課上必要ノ書籍ハ官ヨリ之ヲ貸渡且縦覧室ニ於テ其他ノ書籍ヲ参観セシム」[49]となっている。同校に学んだ者の回想にも「書籍は全部貸與された」[50]とあり，明治5年に司法省明法寮の学生100人に必要な書籍の価格見積もりをしたものでは，法学書はもちろん，文法書，算術書，歴史の本にいたるまで，テキストはすべて100部ずつ見積もられている。[51]テキストと他の書籍についての状況は，東京大学法学部に併合される前の東京法学校のときも同じになっていた。[52]東京山林学校でも，最初の規則である明治15年7月の規則の第8章第29条には「山林学上ニ要用ナル和漢洋書籍ハ」「官ヨリ貸付ス」とある。[53]札幌農学校でも教科書は学校から支給されたようである。[54]私立学校にも目を向けて，たとえば明治16年の時点をみると，テキストを学校で用意するところとしないところがある。慶應義塾では「書籍出納之規則」のなかに「課業ノ書籍大概ハ之レヲ貸ス」[55]とあるのに，東京専門学校では「書籍室ニ設備セル参考書類ハ生徒之ヲ閲覧スルヲ許ス」[56]が「生徒ノ日課用書ハ総テ自辨タルヘシ」[57]となっている。

テキストにかぎらないが，複本が多くあることは学生の勉学にとっては有益なことである。それは，明治10年代後半に東京大学理学部工学科で土木工学を教えたアメリカ人ワデルの授業についての次のような回想を考え合わせてみるまでもなく明らかである。

教科書は皆アメリカ人の著書で厚さの二インチ位ある

本を幾つかの部分に分けて二週間或は三週間位に学生全部に読了させるのです。本は大がい一冊しかないのですから諸君はくじ引きで順序を極めて読んで居られた。貧乏くじに當った人はよく徹夜でよんで居られるのを見かけた。[58]

さて,『学課並諸規則』と“Calendar”には予科と専門科の授業時間割が載っているが，そのなかには書房・Libraryと書かれた時間がある。『学課並諸規則』に時間割のある明治16～18年度だけ示してみよう。

予科の1・2年はどの年度も同じで次のようになっている。(授業時間は月～金曜の8時から12時までと，午後1時から4時まで。9月は午前中だけが授業時間)。

予科1年生

4～6月（夏期）1週間に計4時間半

月曜　2：30～4：00

水曜　　同

金曜　　同

9月　1週間に計5時間

月～金曜，毎日，10：00～11：00

10～3月（冬期）

なし

予科2年生

4～6月（夏期）

水曜　1：00～2：30

9月

なし

10～3月（冬期）

水曜　1：00～2：30

専門科の3・4年では特定の学科の特定の期間にだけある。明治17・18年度は同じで，次のようである。

専門科3年生

土木科

10～3月（冬期）1週間に計3時間

火曜　8：00～9：00

木曜　8：00～10：00

専門科4年生

土木科

10～3月（冬期）1週間に計3時間

火曜　9：00～10：00

木曜　9：00～10：00

金曜　10：00～11：00

明治16年度は土木科と化学科にある。

専門科3年生

土木科

10～3月（冬期）1週間に計4時間

月曜　9：30～12：00

金曜　9：30～11：00

専門科4年生

化学科

10～3月（冬期）1週間に計4時間

火曜　10：00～12：00

木曜　10：00～12：00

明治16年以前の『学課並諸規則』では，予科の書房に割り当てられた時間は多いとされており，明治11年と15年の『学課並諸規則』の書房の本の貸し出し冊数を記した節に，予科の学生は書房での閲覧時間が「許多ナルカ故ニ」,特別の理由によって教師の認可がなければ（休日以外には）本を書房外には借り出せないと書かれている。

実地科は，すでに記したように校外での実習が中心だが，6年の冬期には卒業論文等のために書房も利用される。

第六年ノ冬期ニ於テハ生徒本校ノ書房図学場及ヒ試験場ニ在リ或ハ近傍ノ諸工場諸工事ヲ巡視シ以テ卒業試験ノ為メ論文意匠仕様等ノ準備ニ従事ス[59]

『工部大学校第2年報』の「造家学教授コンドル申報」には，実地科の学生について述べた部分に,「余ハ復タ以為ラク本校ノ如キハ書房ト云ヒ読書室ト云ヒ出入常ニ自由ニシテ」云々とあって,[60]学生の教育に有益なものの一つに書房があげられている。

都検ヘンリー・ダイヤー（Henry Dyer）が工部大学校の第1回卒業式でおこなった講演を，工部大学校の“Calendar”の抜粋などと合わせて，工部大学校で1879年（明治12年）に冊子として印刷した“The Education of Engineers.”[61]には，書房のことが出てくる部分がある。それは第1回卒業式での講演‘Professional Education’のなかである。

the library contains a good selection of books, supplying examples and descriptions of works which have been actually carried out.[62]

書物について述べた部分にも図書館が出てくる。

Carlyle has remarked that “the true University of our days is a collection of books” and that after a student has done with his classes, the next thing is a library of good books which he ought to read and to study.[63]

また，書房と必ずしも直接の関係はないと思うが，工学寮・工部大学校で注意されることに，成績の優秀な学生にたいして賞品として書籍を与えたことがあげられる。

毎年冬期ノ終リニ於テ預科及ヒ専門科ノ各級ヨリ俊秀ノ生徒数名ヲ撰ミ書籍或ハ器具ノ賞品ヲ與フ[64]

実際の賞品から例を引いてみると,[65]たとえば

チャンブル氏　エンサイクロペジヤ　十冊

ランキン氏　応用重学　壱冊

ランキン氏　蒸気機関論　壱冊

ボウ氏　エコノミクス，オフ，コンストロクシエン　壱冊

トムソン氏　電気及磁気論　壱冊

卒業生の志田林三郎や田辺朔郎の遺品のなかには，多数の賞品の書籍があるという[66]し，東京大学総合図書館の蔵書のなかにも賞品の図書が見つかる。[67]このように書籍を賞品として与えることは，同時期の他の学校，たとえば駒場農学校にも例がみられ,[68]また外国人教師たちの出身地スコットランドの教育的伝統でもある[69]という。徳川時代にも，たとえば昌平坂学問所では勧学の褒美として書籍を書生に与えている。[70]

ところで工学寮・工部大学校には，日本で最初の本格的な官立美術学校であり，女性も入学できた，工部美術学校が設けられていた（明治9年11月設置，同16年1月廃止）。そこでは図書館はどうだったのだろうか。工部美術学校の教師たちはイタリア人であったが，彼らのなかのたとえばフォンタネージは，来日に際して，教材の一部として，美術関係の図書をもってきたようである。[71]しかし「工部大学校の資料」のところであげた文献はもちろん,『工部美術学校諸規則』[72]や，国立公文書館の『大政紀要』にあるという工部省の「美術・自明治九年至仝十五年」[73]にも図書館関係の記述はみられない。学生だった者の回想[74]でも同様のようである。工学寮・工部大学校では成績優良の学生に与えられた賞品には書籍が多くあったが，工部美術学校の場合,「進歩」や「精勤」（「勉励」）の賞品として与えられたのは，油絵具，銀時計，水画（絵）具，水画紙横文入，図引紙，図引器械，鉛筆，といったものである。[75]あとで述べる1880年の『工部大学校書房書籍目録』の和漢書のなかには,「画学及彫像」「彫刻及捉影術」の書名がある。[76]しかしとくに工部美術学校のためのものとは考えられない。「化学製造学之部」のところに入っているので，工学の方の図学や造家（建築）学の参考書というわけでもないようである。美術学校学生が書房を利用することがあったかどうかは不詳である。工部美術学校の廃止後，学生の作品などは博物場の所蔵となった。[77]

注

1）中山茂『帝国大学の誕生』中央公論社　昭和53年p. 19

2）ここで「図書館」としたのは，現在使われる一般的な名称としてである。

3）明治10年代の東京大学に限られないが，現在にいたるまでの東京大学全体の図書館史に関する主なものとして，以下のものがある。まず東京大学の公式の歴史である次の3点のなかの図書館の部分。『東京帝国大学五十年史』全2冊，昭和7年。『東京帝国大学学術大観』全5冊，昭和17～18年。『東京大学百年史』全10冊，昭和59～62年。そのほかに次のものがある。高野彰「東京大学法理文学部図書館史」『図書館界』Vol. 27　No. 5，Vol. 28　No. 1, 4，1976年。高野彰「帝国大学図書館史」『図書館界』Vol. 29　No. 3, 4, 1977年。東京大学附属図書館編・発行『図書館再建50年』1978年。薄久代『色のない地球儀（資料・東大図書館物語）』同時代社，1987年

札幌農学校の図書館については，北海道大学編『北大百年史・部局史』，株式会社ぎょうせい，1980年。

4）すこし長くなるが，本稿で扱う工学寮・工部大学校の書房との対比という意味もあるので，他の学校の図書館について要点と文献名をいくつかずつ記しておくことにする。

司法省法学校については，本稿では，主に法学者の手塚豊氏と沼正也氏が同校について書いたものから拾って，なるべくもとの文献にあたったのだが，明治「十一年九月創メテ校内ニ書籍縦覧所ヲ設ク」（「東京法学校年報」沿革,『文部省第12年報附録』(明治17年）所載，p. 560)。手塚氏は同校のフランス書の所蔵数を「驚くべき分量」とされる)「司法省法学校小史（2）」『法学研究』第40巻7号，1967年7月，p. 954)。司法省には明治4年に設けられた文庫があり，司法省法学校の前身，司法省明法寮学校に入学しようとしたものには，その「當時に在りては完備せる」「豊富なる」「（英）佛法（律）文庫」のことが意識されていたようである（池田宏編・発行『大森鐘一』，昭和5年，p. 47，49)。明法寮の司籍課・書籍掛については，沼正也「明法寮についての再論」(沼正也著作集2『財産法の原理と家族法の原理』所収，とくにp. 744-745，三和書房，昭和38年・改訂版)。また，司法省に雇われたフランス人ブスケが，明治5年4月に法律学校について建議した文書の中には「法律学校ニハ盛大ナル書庫アリテ，凡ソ法律ニ管スル古今ノ書籍ヲ蔵メ置キ，博士，生徒等，皆之ヲ看ルコトヲ許ス。」という部分を見出すことができる（引用部分は，手塚豊「司法省御雇外人ブスケの法学校に関する建議」『法学研究』第41巻4号，1968年4月，p. 506)。

駒場農学校では，明治13年6月に編成された規則の第10章が図書室の規則になっている)『東京大学百年史・通史1』p. 748)。明治17年10月刊行の『駒場農学校一覧』では第20章が「書籍及器械・附閲覧人心得」で,「書籍及器械」が全12條,「閲覧人心得」が全13條あり（p. 90－95)，書器掛の職員が1名いる（p. 118)。また，東京山林学校は駒場農学校と合併し

て東京農林学校になるとき，732種の書籍が引きつがれている。この引きつがれた書目やその他にも帝国大学農科大学の前身校の書籍関係についての資料が収録されている文献として，安藤圓秀編『駒場農学校等史料』がある（東京大学出版会，1966年）。農科大学・農学部の図書室は，東京・駒場にずっと続いていたようだが，昭和10年に同学部が第一高等学校と敷地交換の形で，東京・本郷に移転した際に一緒に移った。しかし正規に開館しないまま，昭和20年に戦災で焼失したという（『東京大学農学部図書館概要1985・開館20周年を迎えて』同館　1986年，p. 2－3。『東京大学百年史・部局史2』，p. 1017－1019）。農学系の外国雑誌センター館である，現在の東京大学農学部図書館の開館は，概要の副題でわかるように昭和40年である。

5）本稿では『帝国大学一覧』について『帝国大学一覧・従明治20年至明治21年』の「従明治20年至明治21年」の部分を「明治20／21年」のように書くことにする。

6）「明治24／25年」だけは第2章は「沿革」である（引用した文章は同じ）。なお，最初の『帝国大学一覧』である「明治19／20年」では，「第2章・組織」の冒頭が，帝国大学令発布による帝国大学の設置を述べたのに続けて，「旧東京大学及工部大学校ノ事業ハ総テ之ヲ本学ニ属セシム」となっている。

7）藤田豊「図書館史上の工部大学校」，『図書館学とその周辺』，天野敬太郎先生古稀記念会，1971年，p. 83－92。藤田豊「英国風大学図書館とシラバスの採用」，『図書館学会年報』，Vol. 17　No. 1，1971年，p. 10－11。

8）石井敦「図書館年表・日本篇（明治以後）」，『図書館ハンドブック　増訂版』，日本図書館協会，1965年，p. 779。石井敦「日本図書館年表」，『現代の図書館』，Vol. 7　No. 1，1969年，p. 33。石井敦『日本近代公共図書館史の研究』の「日本公共図書館年表」，日本図書館協会，1972年，p. 299。坂本龍三「日本図書館史年表稿」，『図書館学会年報』，Vol. 17　No. 2，1972年，p. 40。角家文雄編著『日本近代図書館史』の「日本近代図書館史年表」，学陽書房，1977年，p. 212

9）大内兵衛・土屋喬雄・編『明治前期財政経済史料集成　第17巻』所収，改造社，昭和6年。同集成の複製版では，明治文献資料刊行会，昭和39年。および，原書房，1979年。本稿で「工部省沿革報告」について示すページ数は，昭和39年版の同集成17巻のページ数である。

10）複製版がある。青史社，昭和53年。なお『工学博士藤岡市助伝』の「第4篇・追懐」には，藤岡市助と工学寮・工部大学校で接した人たちの回想が載っている。瀬川秀雄編，工学博士藤岡市助君伝記編纂会，昭和8年。

11）『明治初期教育関係基本資料　其之三・工部大学校第2年報』（近代日本学芸資料叢書第4輯）湖北社，1981年

12）明治7～11，15～18年の各年のものが国立公文書館（内閣文庫）に，明治17年のものが東京大学総合図書館に，明治18年のものが国立国会図書館に，それぞれ所蔵されている。ほかに『工部省沿革報告』に明治7，18年のものが，『旧工部大学校史料』に明治7，10，18年のものが，『明治文化全集・補巻3・農工篇』（明治文化研究会編，日本評論社，昭和49年）と『東京大学百年史・資料1』（昭和59年）に明治10年のものが，それぞれ収録されている。（ここに示した年は『学課並諸規則』に表示されている改正年である。本稿では以後すべて改正年で記すことにする）。

13）1876～1880，1883～1885の各年度のものが東京大学総合図書館に，1873，76年度のものが国立国会図書館に，1881年度のものが国立公文書館（内閣文庫）に，1883年度のものが早稲田大学図書館に，それぞれ所蔵されている。ほかに『明治文化全集・補巻3・農工篇』に1877年度のものが複製版で収録されており，また1873年度のものを藤田豊氏が刊行（昭和45年）している。（ここには，“Calendar”にたとえば1876－1877とあるのを1876年度として，1883－1884とあるのを1883年度として示してある。本稿では“Calendar”については，以後このあらわしかたをすることにする。）。

14）『工学叢誌』『工学会誌』には452巻全部の複製版がある（80冊に合本）。日本工学会編，雄松堂，昭和58年。

15）p. 505

16）工学寮・工部大学校の沿革概要は『工部省第1回年報』「工部大学校年報（明治18年）」『工部省沿革報告』に出ている。また，工学寮・工部大学校について次の単行書は重要である。三好信浩『日本工業教育成立史の研究』風間書房，昭和54年。北政巳『国際日本を拓いた人々』同文舘，昭和59年。山崎俊雄『技術史』東洋経済新報社，昭和36年。

17）明治7年は第1条。以後はすべて第1章第1節。

18）すべて第1章第1節。

19）課程等については，たとえば，舘昭「日本における高等技術教育の形成」，『教育学研究』第43巻1号　昭和51年3月，p. 13－23。村松貞次郎「工学事始め」，『東京大学公開講座26　明治・大正の学者たち』，東京大学出版会，1978年，p. 67－101

20）『旧工部大学校史料附録』p. 69，71

21）同上書　p. 71

22）3点ともカラー図版が，吉田漱『開化期の絵師・小林清親』（緑園書房，昭和39年）に収録されている。図版16，42，62（p. 39，65，89）。

23）資料によっては博物場でなく，博物館となっているものもある。

24）『旧工部大学校史料附録』p. 72

25）資料によって名称が，中堂・中房・中央講堂・講堂・広堂，と相違している。

26）明治時代のいわゆる政治小説の1つ『緑簑談』（須藤南翠・明治21年刊）に「明年第一期の開会ハ先年以来新聞紙の屢々報道なせるが如く，元の工部大学校なる中堂を以て假議場に充らるゝ方正説なるべし。」とある（『明治文学全集　5』，筑摩書房，昭和41年，p. 283）。なお，明治24年に国会議事堂が火事で焼失し，衆議院は旧工部大学校の中堂を使用している（貴族院は鹿鳴館）。

27）A. H. クロウ『クロウ日本内陸紀行』，岡田章雄・武田万里子・訳，雄松堂，昭和59年，p. 18。ほかにも，たとえばB. H.

チェンバレン『チェンバレンの明治旅行案内』に「見事なレンガの建物」とある（楠家重敏訳，新人物往来社，昭和63年，p.172）

建物ではないが，グラント将軍は明治天皇と会見したとき日本の教育機関についての感想を述べたなかで，工部大学校の御雇外国人が優秀であるという発言をしたらしい。(土屋忠雄「工部大学校を繞る史的考察」に日本側記録が引用されている，『教育学研究』第18巻6号，昭和26年，p.67。ほかに，J.R.ヤング『グラント将軍日本訪問記』，宮永孝訳，雄松堂，昭和58年，p.108—109)。

28) 『第一高等学校六十年史』昭和14年　p.92。『東京大学百年史・資料1』p.97

29) 篠田鉱造「明治文化史上の偉蹟工部大学校」尾佐竹猛編『明治文化の新研究』亜細亜書房　昭和19年　p.201—232

30) 石橋絢彦「東京帝国大学創立当時の工理学士」「帝国大学創立当時の工，理学士と生存者」『工学』第14巻4，6号　大正15年4，6月

31) 複製版による。佐藤秀夫編『明治前期文部省刊行誌集成・第8巻』，株式会社歴史文献，昭和56年，p.158

なお，この『教育雑誌』所載の書籍館一覧表の内容を，明治11年6月6日の東京日日新聞がくわしく報じている(第2面)。また，この東京日日新聞の記事は次の文献に転載されている。石田文四郎編『新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成』前篇（自明治元年至二十年)，時代文化研究会，昭和9年，p.233

32) 竹林熊彦「明治初年ノ圃事業小観」の「8．明治初年ノ圃一覧」は，『教育雑誌』第68号の書籍館一覧表と『文部省年報』の明治8～13，15年の書籍館一覧表を載せていて，通覧に便利である。『圃研究』Vol.6　No.4　1933年　p.420—425

33) 『文部省第13年報附録』(明治18年) p.464

34) 『旧工部大学校史料附録』p.71—72

35) 『東京大学百年史・資料1』p.78—80『旧工部大学校史料』p.55

36) 『旧工部大学校史料』p.68　測量司は明治7年1月に内務省の所管に変わるまで工学寮に並設されていた。引用文のなかの「寮」とあるところの原文には，「司」も併記されているが，引用では省略した。

37) 「工部大学校年報」(明治18年) と『工部省沿革報告』。ページ数は，あとの注40，41に記す。

38) 『明治工業史・建築篇』工学会　昭和2年（複製版が，学術文献普及会，昭和43年）p.137

39) 塚本靖「明治初期に於ける我国の工業教育」『建築雑誌』第42輯506号　昭和3年2月　p.86

40) 『文部省第13年報附録』(明治18年) p.464

41) p.346

42) 『旧工部大学校史料』p.128。『工部省沿革報告』p.346—347。『東京大学百年史・資料1』p.1020。開校式の挙行と天皇が校内を通覧する予定のことを報じた7月14日の読売新聞の記事（第2面）では，書房と講堂を分けずに「書房講堂」と記されている（転載されたものでは，『新聞集成明治編年史』第3巻・西陲擾乱期，同編年史編纂会編，財政経済学会，昭和15年(再版)，p.418。および，『明治ニュース事典』第2巻(明治11—15年)，同事典編纂委員会編，株式会社毎日コミュニケーションズ，1983年，p.228)

43) 『旧工部大学校史料附録』p.72

44) 時間的にもっとも早いのは，ダイヤーが明治15年に帰国する際，勲3等に叙せられた時の功績記録のようである（塚本靖「明治初期に於ける我国の工業教育」に引用されているものによる。『建築雑誌』第42輯506号，昭和3年2月，p.86)。ほかにも，『工部省沿革報告』，p.348。『帝国大学一覧』の「第2章・沿革及組織」の工部大学校の部分（たとえば「明治23／24年」ならp.5)。『旧工部大学校史料』の「ヘンリー・ダイエルの帰国」の項（p.145）と「外人略伝」のp.160

45) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』，小学館，昭和50年，p.314。または，東京大学総合図書館所蔵『傭外国人教師・講師履歴書』(稿本）の「ヘンリー，ダイエル」の項。

46) 引用は1883年度版。1884年度版もほとんど同文。東京大学総合図書館所蔵の1885年度版は，'Library'をふくむ'General Regulations'の一部がハサミと思われるものでまとめて切り取られていて見られないが，やはりほとんど同じではないかと思われる。

47) 永峯光名「辞典に現われた“図書館”（2)」『図書館界』Vol.18　No.5　1967年1月。とくにp.183—184

48) 上記文献の（3)『図書館界』Vol.19　No.2　1967年7月p.41。高野彰「東京大学法理文学部図書館史」『図書館界』Vol.27　No.5　1976年2月，p.164。同じく（2)『図書館界』Vol.28　No.1　1976年5月，p.6

49) 松尾章一「明治政府の法学教育」『法学志林』第64巻3・4合併号　1967年，p.115。または注4の手塚豊「司法省法学校小史（2)」p.77

50) 柳沢重固「温古知新」『法曹会雑誌』第12巻1号　昭和9年，p.116。手塚豊「司法省法学校小史（3)」『法学研究』第40巻11号　1967年11月，p.65

51) 注49の「明治政府の法学教育」p.110—111

52) 「東京法学校年報」に掲載の「東京法学校校則」第1章総則第8條(『文部省第12年報附録』(明治17年）所載，p.563。次のものに引用されている。注4の手塚豊「司法省法学校小史（2)」，p.97。『東京大学百年史・通史1』，p.726。『東京大学百年史・資料1』，p.102。)。

53) 『東京大学百年史・通史1』p.765

54) 『北大百年史・部局史』，1980年，p.1347。蝦名賢造『札幌農学校』，図書出版社，1980年，p.43。

55) 小田勝太郎編『東京諸学校学則一覧』巻之下，英蘭堂，明治16年，p.471。慶應義塾での教科書貸与については伊東弥之助『慶應義塾図書館史』に出ている（慶應義塾大学三田情報センター編・発行，昭和47年)。

56) 注55の『東京諸学校学則一覧』巻之下，p.524

57) 同上。しかし東京専門学校では明治19年に，教科用の原書

は無料で学生に貸与する制度が設けられた(『半世紀の早稲田』，早稲田大学出版部，昭和7年，p. 544。『早稲田大学八十年誌』，早稲田大学，昭和37年，p. 191)。

58) 『学士会月報』第583号に掲載の「学士会創立五十周年記念座談会」での山口鋭之助の発言のなかのもの。昭和11年10月 p. 33

59) 明治18年の『学課並諸規則』第23章実地科第6節

60) p. 93

61) 著者はHenry Dyerになっている。国立国会図書館所蔵。この"The Education of Engineers."のなかの'Professional Education'と'Non-Professional Education'には邦訳がある。梅渓昇・山中泰「ヘンリー・ダイエル『技術者の教育』」(1)～(8)『生産と技術』Vol. 28 No. 4 (1976年)～Vol. 30 No. 3 (1978年)

62) p. 4。邦訳なら『生産と技術』Vol. 29 No. 1 (1977年) p. 2

63) p. 5－6。邦訳なら上と同じ号のp. 4

64) 明治18年の『学課並諸規則』第20章預科第11節

65) 『工部省年報』の第3，4回に賞品名が出ている。ほとんど書籍で，そのすべてが洋書のよう。

66) 『東京大学百年史・通史1』p. 691

67) 次の3冊は明治13年5月卒業（第2回）の安永義章（機械科）に，明治9年3月と11年3月の試験で与えられた本である。表紙裏にそのことを記した工学寮・工部大学校の英文の用紙が貼付されている。ほかにもこの種の本が所蔵されているかどうかは調査していない。

請求番号U200/137，登録番号B64128
John Perry "An Elementary Treatise on Steam." London: Macmillan and Co. 1874

請求番号U200/138，登録番号B64131
William John Macquorn Rankine "A Manual of the Steam Engine and Other Prime Movers." 7th ed. London: Charles Griffin and Company. 1874

請求番号U200/139，登録番号B64130
William John Macquorn Rankine "A Manual of Machinery and Millwork." 2nd ed. London: Charles Griffin and Company. 1873

68) 明治11年9月13日，駒場農学校の前期試験での成績優等だった学生に，「ウエブストル英語大辞典」「英和字彙」「タングリソン薬名辞書」「ボルン農書」が賞品として授与されている。安藤圓秀『農学事始め』東京大学出版会，1964年，p. 246－247

69) 北政巳『国際日本を拓いた人々』同文館，昭和59年，p. 102の注10

70) 旧事諮問会編『旧事諮問録』下，進士慶幹校注，岩波書店（岩波文庫），1986年，p. 131

71) 隈元謙次郎『近代日本美術の研究』大蔵省印刷局，昭和39年，p. 35，128。工部美術学校については同書と次のものに詳しい。隈元謙次郎『明治初期来朝伊太利亜美術家の研究』三省堂，昭和15年，(複製版が八潮書店，昭和53年)

72) 国立公文書館の，『公文録』明治10年の工部省の部分にあるものと，内閣文庫のものを参照。

73) 青木茂編『フォンタネージと工部美術学校』(『近代の美術』第46号)，至文堂，昭和53年，に掲載のものによる。p. 96－99

74) たとえば次に収録のもの。青木茂編『明治洋画史料・懐想篇』中央公論美術出版，昭和60年

75) 『工部省年報』の第3，4回に出ている。

76) p. 75

77) 『工部省沿革報告』p. 349。工部省「美術」(注73の『フォンタネージと工部美術学校』p. 99)。